



木下恒雄 (1)

木下恒雄

春野町の碩学、郷土史研究家の木下恒雄さん(85歳)を訪ねた。北遠の林業史、お茶栽培の歴史、村の成立史、災害史など、多岐にわたって造詣が深い。

「お茶の文明史」「山林の思想」「遠州林業史」「嫁取り婿取りばなし百話」「山国兵士の出征ものがたり」「山の人生 川の人生」「自然災害史」など、著作は30冊余になる。

今年になって、春野町の集落ができた背景となった王子製紙の歴史「山里にやってきた文明開化」をまとめる。

東京で警察官をされていた。定年退職して、30年前に故郷の春野町に戻った。語り口はつねに力強い。固有名詞も数字も正確。滔々と熱のある話。お訪ねすると、ゆうに5時間、6時間のお話になる。

向学心、研究心がすごい。たんねんに文献もしらべる。国会図書館から明治時代の新聞をコピーして送ってもらい、克明に災害の年表をつくり、整理して書はあげる。また、徹底して人に会って取材していく。

一冊の本を仕上げるのに100～300人くらいに会う。テープレコーダなど使わない。メモして頭の中に記憶している。警察官時代の聞き取り調査の体験が元にある。

現職時代、ワープロなど世の中になかった時代、本を書くために和文タイプライターを独学で習得。活字を拾いながら打ち込んだという。いまはパソコンのワープロソフトを使って執筆する。

奉仕活動もずされている。毎年100本ものサクラの苗木を気田川の河川敷に植えてきた。10年以上も続けたというから、ゆうに千本にもなる。幼稚園児のために芋作りも、20年以上もされていた。老人ホームなどで、ボランティアでお話の会もされている。

次の構想は、渋沢栄一と雄牛生徒の物語、さらには山里から戦争に征き、二度と帰ってこなかった若者たち、そして家の大黒柱を失った村人の悲しみの歴史を書きたいと言っておられた。

問い合わせ先：木下恒雄(053—985—0186)

浜松北部生きがい特派員 池谷 啓